

平成 18 年 7 月 14 日

於：湯島聖堂

中齋塾準備フォーラム 東京会場 第一回 講話

深澤でございます。

よろしくお願い致します。

私にとっても、今日は楽しみでわくわくしながら参りました。

私も還暦目前となりました。

還暦は社会にお返しする年代とっておりますので、何をしようかと、ずっと考えていました。

以前から人間学に興味があって有志と勉強していたのですが、そろそろ自分なりに掴んだものをお話して、又皆様からも教えて戴いて、お互いに切磋琢磨していこうではないかと考えて今日を迎えました。

私の中齋塾フォーラムでさせて戴きたいと思っているのは、一つだけです。

それぞれの方が判断基準を身に付けて下さればよろしい、と思っています。

私は木内信胤先生から教えて戴いたことが基本となり、現在に至っています。

それは<総合的直観力>という言葉でした。

難しく入りづらいのですが、そういう言葉があるのだという事を覚えて戴いて、もう少し入りやすいものは何かを考えてみましたら、安岡正篤先生の<思考三原則>が良いということを感じました。

ただ文章としては長いので、もう少し分かり易くならないかと考えて、私なりに詰めて解釈した結果、<本質・歴史・大局>という言葉に辿り着きました。

私はこれを<判断の三原則>と呼ばせて戴くことに致しました。

この内容を皆様方にお話して、それぞれの方が納得して戴けると嬉しいなと思います。

皆様方が納得して下さると、私の話したものが自分に返って来て、更に血肉になります。

聞いて下さった方が納得して戴くと、私も少し覚えたなという事になりまして、自分自身の勉強になります。

判断の基準を身に付けて戴くと、最終的に出てくるものは、“人の生き方は、ほどほどが良いのではないかと・・・”だと感じます。

人間は無茶して我欲ばかりいつも出していると、今回テーマにした日銀の福井総裁のよ

うな問題を引き起こす事になるだろうと思います。

ですから、我欲を突っ張らせてはいけない。

ほどほどで良い、と思います。

いわゆる<知足>(足るを知る)というところまでいけば、これはもう有難いと思っています。

今日は日銀の福井総裁の問題を本質・大局・歴史で眺めたらどうか・・・という事を考えて戴こうとレジメを作りましたが、具体的な判断基準をいくつかお話して、それに絡めて福井総裁の話も、どう受け止めればよいかお話させて戴こうと存じます。

判断基準を考えるにあたって、<見・観・察>という言葉から入ろうと思います。

安岡先生は<視・観・察>を説明しておられます。

例えば、今日名刺交換をしました。

誰か一人印象に残った人がいたとします。

それは「見」の段階です。

会った(見た)時、意識には残ります。

印象深ければ、かなりの程度記憶に残ります。

「視」は、意識して見るという事です。

印象に残った人の話を頭の中で思い浮かべたり、顔を注意深く見たりするので、翌日になっても少しは記憶が残ります。

次の段階は、「観」です。

「観」は観察の「観」です。

じっくり観察しますから、その方の記憶が鮮明に残る。

次にあった時に、しっかりと思い出す事が出来る。

渋澤栄一という方がおられます。

渋澤老人の記憶術と言われた方ですが、その記憶術は、「論語を実践したことで生まれた」とご本人が言っておられます。

それは<省みる>という言葉です。

夜寝る時に、今日一日どなたにお会いして、何の話をして、何の約束をした・・・と全部思い出したところで眠りに付くのだそうです。

渋澤栄一さんは日本で最初に株式会社を作った人で、近代資本主義の父と言われています。

生涯で五百数十社の日本の基幹となる会社を作りました。

その後、六百数十の社会奉仕や教育関係など、今でいうとNPOのような事を手がけました。

ご本人曰く、「一生涯の中で私は、日本に株式会社の制度を根付かせる事が日本の為になると信じて、一生それにかかけたい」という事で官界から民間に出て、第一国立銀行を創りました。

「国が作った会社は皆ろくでもない会社ばかりで、皆潰れている。

民間でまともにやっている会社は、共通項がある。

順調に発展していく会社は、一つしか発展する鍵を見つける事は出来ない。

その鍵とは、その会社を経営する人物、経営者の思想如何・経営者の人物如何である。

その経営者が人間学を修めて素晴らしい人物であれば、会社は発展する。

邪な考えを持っている人物であれば、会社は潰れる。

だから国が作った会社はどんどん潰れている。」

というような言葉を残しました。

今の銀行の体たらくは何ということでしょうか。

「見」は、初めて会って「何となくそういう人と会ったな」という程度です。

「観」は、お会いしてその人の事を覚えた。

内容も承知している。

夜寝る時に思い出してみたら、顔も分かるし、どんな話をしたかも分かる。

よく観察して、記憶が鮮明に残っている。

「察」は、その人の心の動きを察知する。

その人の心の動きを察知することが出来れば、「察」です。

翻って自分自身が人とお付き合いをする時に、どういうお付き合いをしているのか……。

「観」なのか「察」なのか。

やはり人とお付き合いをする時は、「察」の段階で出来れば良いですね。

渋澤老人の記憶術は、「観」のところですが、何年経ってその人と会っても“この方とはこういう約束をした……”とすぐに思い出したそうです。

ですから「観」から「察」に変わってきているのではないかと思います。

「察」に変わるというのは一つポイントがあります。

夜寝る前に思い出す事です。

皆さんも何かこうしたいという夢があったら、夜寝る前に、眠りに落ちる寸前に“ああ

願ったことがかなって良かったな・・・”と思うことです。

自分が願ったことが“かなえられるといいな・・・”と思って寝たのでは、あまり達成しません。

“かなえられて良かったな・・・”と過去形で思って眠りに付いた時には、「察」の段階に入っています。

それを深澤栄一さんは寝る前に繰り返したわけです。

判断基準について、もう一つお話しをします。

人生の切所、つまり危機が発生した時に、どういう行動をとるか。

この時の判断基準があります。

家庭の問題とか、会社の問題、地域の問題、国家で言えば国家の問題があります。

切所の時に、平常心で対応できるかどうか。

平常心がある時とない時、それによって判断基準が変わります。

平常心の時には、簡単な言葉で三つ申します。

一．嘘はつかない。

一．約束を守る。

一．わけの分からぬ金に手を出さない。

これらは誰方でも当たり前のことで、承知しているけれどもなかなか出来ないものです。

例えば夫婦の間でも、気がつかないうちに嘘もつきますね。

平常心の時には、今ある問題について嘘を付いてよいか悪いかを、よく考えれば良い。

福井さんも国会で答弁する時に、最初は素直に答弁していて良かったのです。

後は情報を小出しにして、小さな嘘をいくつもついたから、後始末で困ってしまったわけです。

「わけの分からぬ金に手を出すな」というのは、リクルート事件の頃にある先生から教えて戴きました。

「深澤君、人生まともに送りたいかい・・・なら、わけの分からぬ金に手を出してはいけないのだよ。」

それから「女を泣かしてはいけないよ」

と教えて戴きました。

平常心でない時の判断基準はどうするか。

危機が襲ってくる時は、大体冷静ではられない時です。

雪印や三菱で最近起った事件を見たって、絶対に潰れそうもない会社がとんでもない事件を起こして、倒産の危機に直面するのです。

過日、事件を起こした当事者の或る社長が「俺だって、寝ないでやっているんだ」と言いましたね。

それがテレビに映って、会社は倒産の方向に行ってしまいました。

最近は姉齒がありましたね。

東横インもそうでした。

「40キロで走る所を、たまたま60キロで走ったようなもので、今までなんともなかった。誰でもやっていますよ・・・」とテレビの中で社長が言っていました、その時に自分の心の中にクエスチョンを持たなければ良かったのです。

つまり先ほどの「察」が必要なのです。

時代を洞察する力が必要な時代だと思います。

今申し上げた事は、個人対個人の話、会社の中の話、家庭の中の話です。

ただ我々はその時代その時代、そして一つの国の中で生きているわけですから、国家の流れがどうなっているか、時代の流れがどうなっているか、それを見るための洞察力も必要です。

洞察力は先ほど申しました「察」です。

最近の時代は、ちょっと話した事がすぐにマスコミに広がって放映されます。

時代の流れが変わったのだという事を意識すると、法律は今極端に変わりました。

今まで何ともなかった法律のチェックが、極度に重箱の隅を穿るようになった。

それは、国に金がなくなったから、何とか税金でとりたいと思う事から始まったようです。

何とかしてお金を集めたいと思うけれども、残念ながら日本の政治家・財界・官界すべて哲学がなくなった。

拝金思想に毒されたまま、哲学が欠如したわけです。

先ほど自己紹介で、「人徳を積みたい」とおっしゃった方がいますが、徳を積むという事が今ほど必要な時代はないと思います。

時代を洞察するために学問が必要です。

経営者には学問の裏付けが要るし、学問の裏付けのない経営者は経営してはならないと私は信じています。

学者も経営の実体験が要ると思います。

時代を洞察するために、今日本の国はどのような状況にあるかという事を見る必要がある。
そうすると学問の裏付けのひとつとして、干支学というものがあります。
60年サイクルで過去を振り返る必要性があると、干支学を知るにつけ、つくづく思うようになりました。

60年前に何が起きたか・・・。

資料を読み上げます。

1月1日、天皇の人間宣言がありました。

2月1日、農地改革が実施されました。

2月3日、日本国憲法の草案作成をマッカーサーが民放局に指示をし、10日後GHQの草案が完成しています。

ですから日本国憲法は、10日間で出来上がったわけです。

2月17日、金融緊急措置令発布、食料緊急措置令発布。

金融緊急措置令で、お金持ちには財産税をかけました。

仮に皆さんが1億円の財産を持っているとします。

60年前の日本は、9割の財産税をかけましたから、9000万円を税金でとられる事になります。

貧乏人にはどうしたのでしょうか。

新しいお札を発行すると、昔のお金は使えなくなるから、今ある筆筒預金をすべて銀行に預けて下さい、となります。

銀行に預けると下ろせません。

お金持ちの人から財産税を取り終わったら、下ろしてもよいという事でした。

それが昭和21年2月17日付けの新聞に載っています。

3月には、都会地転入抑制緊急措置令が公布されました。

食糧事情が悪化したために、地方から都会に来てはならない、という命令です。

このように60年前は、日本がひっくり返っていた時代です。

そうするとその前の60年はどうだったか、調べる必要がある。

西郷隆盛が西南戦争を起こした後始末の頃が、その前の約60年前です。

60年、60年で日本国の歴史を調べておいた方が良からうと思います。

それから、今後の60年後はどうなるか。

一つの具体的な事例で、ネバダレポートというものがあります。

近未来に関する話です。

これは日本の国が破綻したらどうなるか、世界的に日本がこうなるという事が公表されている処方箋です。

I M F の調査団と日本の閣僚の合作だと言われています。

2001 年 9 月に国会で発表になっています。

国家公務員・地方公務員の給料は 30%カット、ボーナスは例外なくカット。

公務員の退職金は全額カット。

年金は 3 割カットする。

消費税を 20%にする。

年収 100 万円以上の人から、すべて税金を取る。

資産税を導入し、銀行に預けてある預金については、一律 3 割没収する。

・・・2001 年 9 月に国会で、当時の柳沢金融担当大臣が発表しています。

こういう情報を全部仕入れて自分の中で咀嚼して、<日本の時代はこういう時代なのだ、だったら日本は今後こうなっていくぞ>という事を察知する、洞察力が我々は必要であるという事です。

ですから<見・観・察>というものの判断基準は、個人、家庭、会社、地域、国・・・という観点でそれぞれ見る必要がある。

そうしますと人生の切所における判断基準、特に気が動転した時にはどうしたらよいか考えてみましょう。

私も頭の中が真っ白になる事があります。

そんな時には私は、たった一つだけ危機を免れるおまじないを持っています。

自分が日頃、言い続けている台詞を思い出せば良いというおまじないです。

パニックになった時にも、自分がもっともらしく言っている事が何か一つあると思います。

自分で一つ心に決めている台詞があったら、それだけ思い出せば良い。

そうすると面白いもので、ちょっと落ち着きます。

私はホテルに泊まると必ずやる癖があります。

チェックインしたら、部屋に入る前に必ず非常口を探します。

非常口まで行って、必ずドアを開けて外に出て、新鮮な空気が入る場所かどうか確認をします。

確認できたら、そこから何歩でドアまで戻れたかを調べます。

寝る前には、真夜中火事が起きたら・・・ドアを開けて右に行って 50 歩・・・とか思い出して寝るようにしています。

私はそういう癖を持っています。

皆さんも出来れば、口に出さないでいいような、日頃の習慣を身に付けられると良いと思います。

パニックになった時には、何か一つ身に付けているものがあると、自然と身体が動きます。身に付けた習慣は、生きてくるという事です。

陽明学という学問は行動しなければ役に立たないというのは、そのあたりがあるのです。

ホテルに泊まった時、非常口はここか・・・とホテルの案内図を見て寝るのは、知識の段階です。

知識だけではどうにもなりません。

<知識・見識・胆識>と言われるものが、判断基準にあります。

知識は、資料だけ見て“こっちに非常口があるのだ”という段階。

見識は、“ドアを出たら右に行けば助かるぞ”と覚えて、人様に話が出来る段階。

胆識というのは、火事の燃え盛っている現場にぶつかった時に、水をかぶったり布を濡らして、猛火燃え盛る中を誰かを助けながら出て行くような、実行力を伴った識です。

ですから時々、自分は火事場騒ぎの時に知識だけか、それとも見識か・・・。

見識だけでは行動力は伴わないから、焼け死んでしまいます。

胆識があれば、実行力を伴っているから生き残ります。

私は生き残りたいからそういうものの考え方をして、体に判断基準を身に付けて、パニックになった時に浮かぶように努力をしています。

行動して始めて、自分の身に付くのです。

今日申し上げた判断基準、<見・観・察>・<知識・見識・胆識>、こういったものを自然と身に付けて戴くと良いと存じます。

では福井総裁の問題に参ります。

福井総裁は、少なくとも知識はあったと思います。

見識もあったと言えましょう。

“変な金に手を出してはいけない”という事は知っていた。

けれども胆識がないから、ついつい手を出してしまった。

我欲があったのでしょう。

拝金思想に毒されていたとも言えます。

権力の座に着いた人は、すぐに墮落するものです。

私は木内先生に「人間はいくら偉くても一瞬にして墮落するよ。だから墮落しないように努力しなければいけない」と教わりました。

特に社長だとか、会長だとか危ないですね。

福井さんは総裁という立場で、ちょっと私利私欲に負けたため、あぁなってしまったのだと思います。

福井総裁問題の本質を考えます。

どのような問題ととらえるか・・・。

日本の国が行き詰って再生するために、落ちる所まで落ちなければいけないという日本の状況があります。

これから日本の国は噴火しますから、日本が国家破綻をする前の前兆として噴火が起きた。

それが日銀の福井総裁の問題であると捉えました。

問題となったきっかけは何か・・・。

それは本人の国会答弁だし、これは本人が予測力を失った日本人の代表事例であると捉えました。

問題の状況把握と経緯は、皆様方新聞等でご存知の通りだと思います。

大局から見るとどうか。

大局は色々な立場から見るという事です。

日本銀行の立場、日本政府の立場、国民の立場、マスコミの立場、国外の立場・・・それぞれの立場でものを考える必要がある。

ただこの時のポイントが、日本もアメリカも破綻寸前の状況下ですから、“とんでもない間違いを犯すぞ”という観点で、大局観で見ないと間違えると思います。

時代の歴史、文明法則史学でいくと、世界の歴史は約 800 年から 1,000 年の周期で繰り返されると言われています。

その観点から見ると、今、世界の歴史が大きく揺らぎ、崩れ、そして西洋文明から東洋文明に移行する段階の転換期にあると思っています。

そういう時代ですから、一つの国が滅ぶという事は当たり前だし、一つの国が新しく生まれるのも当たり前です。

いわんや一政府の首相の首が飛んだり、政府がひっくり返るのも当たり前だと思ってい

ます。

ですから日本の国が滅びようとする大きな時期、それを潜り抜けて、不死鳥として再生する、今はそういう切所であると思っています。

そして日本が再生する時の力というのは、日本のみならず世界を再生させる力を持って蘇るであろうと思います。

歴史で考えます。

日銀の歴史もそうですし、日本国、外国の歴史をずっと見ていけば、日銀の福井総裁問題は出るべくして出たと思っています。

最近はブラックマンデーの話ばかり耳にします。

近いという事です。

今日は準備フォーラムでございます。

フォーラムの中での指針は、暁鐘にさせて戴きました。

この暁鐘は、安岡教学の中から頂戴しました。

もともとは、王陽明の漢詩『睡起偶成』がもとでございます。

世の中に警鐘を鳴らすという意味です。

以上で本日の私の講話は終了にさせて戴きます。

有難うございました。